



大人の言語発達と成熟語彙・表現

著者	川? 晶子
著者別名	KAWASAKI Akiko
雑誌名	言語文化論集
巻	44
ページ	53-67
発行年	1997
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153978

大人の言語発達と成熟語彙・表現

川崎晶子

0. はじめに

学生と接していると、3、4年生になり就職活動を始め急に大人っぽくなる者にしばしば出会う。受け答えが丁寧になったり、礼儀正しくなったり、せいぜい尊敬語や謙譲語がうまく使えるようになった程度の変化なのだが、社会人としての第一歩を踏み出そうとしている様子が見て取れる。卒業してから久しぶりに会うと、また大きく変化していることがある。敬語の使い分けだけでなく、相手への心遣いを決まり言葉でさりりと言ってのけたり、言葉の運用に関して前よりも自信を持っていることが言動から推測される。巣立っていった社会でそれなりの活躍をしている、しっかりしたなという印象を受ける。

学生から社会人になったときの言葉の変化は、幼児の言語発達が目を見張るような変化を見せるのと同じように、大きな変化であることが多い。女性の場合は、主婦という肩書きが加わった場合にも、何らかの変化をおこすことがある。そのような話し手の言語の変化は、大人の言語発達とでもよぶべきものであるが、そこには、社会にある「一定の社会的立場にふさわしい言葉の使い方」に関する共通の理解に近づこうという努力と、様々な経験から体得していった円滑な人間関係を保つのに役立つ言語運用のうまさが見て取れる。

本稿では、著者が知る限りまだほとんど研究が進んでいない「大人」の言語発達の社会言語学的側面に光を当て、成人語、成熟語彙・表現、等の概念を導入しながら、研究方法をさぐる。

1. 発達社会言語学と大人の言語発達

大人の言語発達は、所属言語集団への社会化の一つであり、言語運用の熟練化の一つでもある。

言語発達の分野で、言語運用や社会化と深く関係する分野は発達語用論や言語的社会化などで取り扱われてきている(Ochs & Schieffelin 1979, Schieffelin & Ochs 1936, 他)。また、発達心理学や社会心理学の分野でも、社会化の一分

野として所属集団での言語の発達に取り上げられることがある(塩見 1986、Schneider 1993、他)。しかし、ほとんどが幼児から小学生レベル、まれに中学生・高校生レベルを対象とした研究で、筆者が知る限り大人の言語発達の研究は移民の言語習得や第2言語習得のものに偏っている。

最新の社会言語学のハンドブック(Coulmas 1997)では、第9章を社会言語学的変数としての年齢というトピックでまとめている。それ自体、画期的な事であり、文化・社会によって年を取るの意味が異なること、単に年を重ねることではなく、社会的に成熟するという意味で年を取ることに意味がでてくることなど、広い視野でこれまでの研究を検討している。ここでも、この分野の未成熟さ、中年の話者を対象にした研究の少なさ、大人の言葉の研究の少なさがあがっている。

母語話者の大人の言語発達に関してこれまで話題にされてきているものがあるとすれば、それは言語能力に対する意見や言語意識に関することである。日本の敬語や言葉遣いの調査では、しばしば話者本人の言語運用能力に関する問いが含まれる。多くの場合、日本人は敬語の適切な使用など言葉遣いの重要性を感じているが、話者自らの言語運用能力を不十分と思ったり、自信がないという傾向があることが報告されている(菊地 1994)。

上記の先行研究の状況からもわかるように、大人の言語発達は未開拓の分野である。現在まず第一にしなければならないことは、いくつかの関連の研究を有機的につなげながら、大人の言語発達研究の分野の確立と研究方法を検討し、大人の言語発達の研究に方向性を付けることである。

2.1 大人

大人の言語発達を研究するには、出発点として特定の言語社会の中で「大人の言葉」はどのようなものなのか、どのような言葉が「大人らしい」と感じられているかを明らかにする必要がある。次に、その社会の中で期待されている「大人としての言語の発達」の状態を具体的に知る必要がある。また、社会の構成員が「大人としての言語の発達」にどのような意識を持っているか、具体的にはどのような過程で大人としての言語発達をしていくかを知る必要がある。そのような研究の積み重ねで、はじめて、大人の言語発達の全体像が見えてくる。

まず、大人の言葉にかかわるいくつかのキーワードについて検討する。

「大人」とは何であろうか。新明解国語辞典(三省堂)では「一人前に成人

した人。」と定義し、〔自覚・自活能力を持ち、社会の裏表も少しずつ分かりかけてきた意味でいう〕と注が添えられている。

生物学的視点をとれば、生殖が可能になると大人といえる。文化人類学的視点をとれば、属している集団が成人と決めている条件に合致した時点で「大人」となる。日本では、成人は「〔法律上の権利・義務などの観点から見て〕社会の一員とされるおとな、〔社会通念・少年法では、満二十歳以上を指す〕」（新明解国語辞典）というわけで、20歳で「大人」になるといえる。社会言語学的視点からも「大人」を定義する事ができる。それは、一人前の社会人としての言語運用能力が備わった時である。この場合、20歳で突然大人の仲間入りをするように急に大人になるわけにはいかない。徐々に経験を積み、自覚を育て、社会の一員として成熟し、「言語的に大人であること」（Linguistic adulthood, Kawasaki 1995）のレベルに達するのである。「言語的大人」であることそのものも、一律に決まっているわけではない。様々な様相を呈しており、各言語集団の理想のようなものがあり、社会人1、2年で「言語的大人」といえる場合もあれば、不惑の年になってもまだまだという場合もある。しかし一方で、母語話者は「言語的大人」に対するイメージを何らかの形で持っており、それは、日常のやりとりの中で、「自らが十分に言語的に大人でないことへの不満・不安」、「大人であることを期待した人物から大人でない言葉かけをなされた場合の反感」、「子供に対しての徐々になされる大人の言葉の指導」、「子供が分不相応に使う大人の言葉に対するとまどい」、などの中に観察される。

2. 2 大人の言葉、成人語、成熟表現・語彙

「言語的に大人」な話者が話す言葉とはどのようなものであろうか。「言語的な大人」専用の語のようなものがあるのであろうか。大人らしさを感じさせるような語をここでは「大人の言葉」あるいは「成人語」と呼び、幾つかの例を見てみよう。

自分の父親のことを他人に話すときに、幾つかのバリエーションがある、

1. (うちの) _____が、…
- 1a. パパが、…
- 1b. おとうさんが、…
- 1c. 父が、…
- 1d. (父)親が、…
- 1e. おやじが、…

誰が使うかという観点から見ると、1a、1bは子供の言葉、1c、1d、1eはそれよりは大人の言葉という分類がおおざっぱにできる。使い始める時期や使う場面は多様であるが、1cから1eは大人の言葉といえる。「父が」はあらたまりを意識しだしたときに、使い始められる。筆者の周りでは、小学校中学年か高学年あたりで、作文を書くときに父/母を使うようになり、また、家庭の教育で、見知らぬ人から電話を受けたときに「父/母は今いません。」のように使うようになるようである。日常の会話で、ややフォーマルな時に、父/母を使うようになるのは中・高生であろう。作文や電話の時に使うという限られた場面での使用ではなく、あらたまりの程度を自ら判断し、それにあわせて使うようになる。一方、「父親が」「親が」「おやじが」というのは、あらたまりの意識とはやや違った次元での大人の言葉である。話し手が聞き手の前で子供の頃から直接父母に呼びかけるときに使っていた呼び名を使うのを照れる気持ち、親を一步離れたところから見ているような印象を与えたい自立の気持ちが反映された言い方で、話し手の親のとらえ方を反映している。

いつから使い始めるかに関して、柴田が1959年から1976年にかけて、「母」と言えるようになるまで」という一連の研究をしている(柴田 1978)。東京山の手と下町の小学生と女子中・高校生5481名を対象にした質問紙法での調査では、「受け持ちの先生から紹介された女性にお弁当は誰が作るのか聞かれたとき」という場面で「母」と言うかを探っている。山の手の方が下町より多くの生徒が「母」と言うといい、山の手の小中学生では女子が6%、中学生では68%、高校生では99%でほとんど全員が「母」と言うといっている。実際に100名ほどで面接で実際に使うかを調査してみると、やや割合は減り、小学生で5%、中学生で41%、高校で90%が「母」を使った。同調査は、静岡市、焼津市、東大阪市などでもおこなわれており、結果は似たようなものであった。また、どの地域でも中学1年、高校1年で、急に割合が増える傾向があった(柴田 1978)。

柴田は「よその人に自分の母親のことを言うのに、『おかあさんは…』と云っては、失礼だ、おかしい、子供っぽい、といった感じが、おとなの間で一般的になっている。だから、子供たちも、小学校時代にはたいていの者が『おかあさんは…』と云っているのが、高校生になると、ほとんどそう云っている者がいなくなる。」とまとめている。この「おとなの間で一般的」という感覚が、一般の人々の大人の言葉のとらえ方で、社会で共有されている大人の話し方のルールである。

冒頭で「大人の言葉」と「成人語」の二つを用語としてあげておいたが、成人語という「成人になる」という意味合いが色濃くでて、年齢的にも20歳以上の印象が強くなる。父/母などの言葉は、子供っぽくない話し方ということで、高校生の段階で十分使いこなしているものである。それを呼ぶ呼び名としては、「大人の言葉」の方が的確であると考えられる。

ここで、注意しなければならないことが、一つある。それは、話し手のレパートリーに「大人の言葉」があるからといって、その話者が必ずしも「言語的に大人」な話し手とはいえないということである。先ほどの、三人称的な父を言うことばにもどると、「おやじ」は、ある程度の年齢にならないとレパートリーに入らない言葉である。しかし、フォーマルな席で「おやじ」を使用すると、時と場をわきまえていないということ、言語的に大人ではないと見なされる場合もある。つまり、レパートリー内の「大人の言葉」を、時と場合に適合した運用をすることができるのが、「言語的に大人」だということになるのである。

一方、「大人の言葉」でも、父/母などよりはもっと大人っぽく響く部類がある。例えば、「とんでもない」という言葉である。「あなたのおかげ」等のように目上の人から感謝されたときなど、謙遜して「とんでもない」という場合、これは、かなり大人の表現である。目上から感謝されたときに、単純に感謝を受ける、照れる、否定する、などの反応が返るが、日本文化の中では否定するのが社会的に成熟した成員の典型的な反応であろう。否定するのが「大人」のやり方なのである。かつ、否定の仕方にも様々あり、「いや、どうも」「いや、そんな」のように、軽く否定するものから、「そんなこと、ありません」とはっきり否定するもの、「とんでもない」のように強く否定するもの、「こちらこそ」のように比較を持ち出し感謝の視点を相手に向けるもの、などがある。その中でも、強い否定や比較は、人間関係を考える社会的に成熟した話者のやりかたで、大人の言葉遣いといえる。これは、大人の内でも社会的にかなり成熟した話者によって用いられるものと考えられる。

同じように「お元気ですか」「おかげさまで」の「おかげさまで」も社会的にかなり成熟した話者によって使われる大人の言葉である。大学生レベルの成熟度では相手に具体的に世話になるなどのおかげをこうむった時のみ使用するが、成熟度が増すと具体的なことがない場合にも使用するようになる。

夜電話をかけたときにしばしば付け加えられる「夜分恐れ入りますが」の様な「注釈」²⁾とよばれるいいまわしも、話者の社会的成熟度と正の相関をもって

使用される。中学生・高校生でも「夜遅くわるいんですけど」「夜かけてすみません」などのことを言うこともある。これは、「夜分恐れ入りますが」のような大人のいいまわしを含んではないが、社会的な常識に照らし合わせて自分の非をわびるといふ言語行動をとっているという点で、成熟表現の予備軍といえるものであろう。

成熟表現・語彙は、「電話をするなら、あまり遅くならないうちに」という日常生活の常識、日本文化の中での「おかげ」の概念、等、社会的な営みをしていく上で重要なポイントを理解しだすと使える言葉である。本稿では、大人の言葉の中でも、このような、文化的背景を背負い、社会的に成熟した話者によって話される特定の言葉を、成熟語彙・表現と名付け、以下のように定義し、特に注目していく。

成熟語彙・表現：大人らしい話し方の要素の一つで、話し手の社会的成熟度と正の相関をもって習得され使用される語彙、表現、いいまわし、きまりことば。話者の属する言語集団内で尊重されている、人間関係や社会生活に重要な概念を含む。

3. 1 成熟語彙・表現の収集

大人の言語発達の研究の出発点は、特定の言語社会の中で「大人の言葉」はどのようなものなのか、どのような言葉が「大人らしい」と感じられているかを明らかにすることである。その一つの有効な方法は、成熟語彙・表現に注目して用例を収集することであろう。

成熟語彙・表現の収集は、日本では独特な方法をとることができる。日本語話者は言語運用のうまさや、定型を時と場合に応じてうまく使いこなしているかどうかで判断する傾向がある。一方、自らの言語運用に関しては、自信がなかったり、まだまだ不十分であると感じている者がかなりいる。そのため、いわゆるハウツー本が書店で容易に手に入る。

これらの書籍は、著者あるいはグループが日常の経験から役に立つと感じている表現を集めたものがほとんどであり、語彙のレベルからいいまわしのレベルまで、内容的には、感じのいい丁寧な言い方から言いにくいことを上手く言うコツまで、場面や目的ごとに列挙されているものが多い。しかし、多くの例が成熟語彙・表現といってよいもので、表現収集の宝庫となっている。いくつかの書名をあげると、『大人のマナーことばの便利帳』(知的生活研究所 1994)、

『気のきいたひとこと』(J.S.クリエーターズ 1991)、『気の利いた ちょっとしたひと言』(川崎キヌ子 1994)、『一人前のあいさつと話し方』(村岡正雄 1992)、『ちょっとしたものの言い方』(パキラハウス 1990)、などがある。

『大人のマナー ことばの便利帳』の「はじめに」では

言葉づかいは心づかい

どんなとき、どんな場所でも恥ずかしくない大人言葉を話せる人に...

かくも日本語は難しいものです。社会人になれば特に「大人としての正しい言葉づかい」が要求されます。...

本書では、正しい言葉づかいもさることながら、それをどこで、どんなときに使ったらいいのかを細かく説明しています。きっと「大人社会で必要な最低限の言葉のマナー」をマスターしていただけることでしょう。と書かれている。この本は男女を問わず新社会人向けに書かれているものだが、本稿で注目している大人の言語発達をまさに手助けするために書かれているものである。たとえば、「お断り言葉」の項では、まず「前置き」として、

大変残念ですが

あいにく...

まことに申し上げにくいのですが

お役に立ちたいのはやまやまですが

頼られがいのないこととお恥ずかしいのですが

大変光栄には存じますが

悪いけど

が列挙され、自分も無念であるとのニュアンスが込められている、「ご事情はお察ししますが」と同様相手の身になった言い方、「私には身にあまるお話で」と続く自分を卑下して断る前置きフレーズ、などの解説が細かく付いている。この本を読めばすぐ成熟語彙・表現が使いこなせるかという点と実際はそういうものではないが、新社会人は本で知識を頭に入れておき、周りが使っているのを見よう見まねで試したりして、自分の言葉にしていくのであろう。

鈴木(1995)は、大学生の感性で、上記のようなハウツー本から注釈表現を抜き出し、その用例を分析した。364の用例の分析には、発話の内容やその背景にある話者の気持ちや配慮から、

自分を低める(例:私などがしゃしゃりでて不躰ですけども)

相手との心理的距離を調節する(例:私がとやかく言うことではありませんが)

- 縁を重んじる（例：私とあなたの仲ならこれくらいのこと）
- 言い訳をする（例：忙しくてなかなかいえなかったんだけど）
- お礼の気持ちを表す（例：いつもお世話になっております）
- 謝罪の気持ちを表す（例：お忙しいところ申し訳ありませんが）
- 労をねぎらう（例：わざわざご足労いただきまして）
- 相手の状態を理解する（例：お忙しいところ恐縮ですが）
- 社会のルールに言及する（例：夜分恐れ入りますが）
- 「として」のように社会的立場や発話の意図を明示する（例：これは先輩として忠告するのだけれど）

などの項目がたてられている。各注釈表現にこれらの項目がどの程度かかわっているかを分析しているのだが、自分を低める、謝罪、相手の状況の理解、社会のルールに言及、がそれぞれ100近くあるいはそれ以上の表現にかかわっていることがわかった。

ここで項目にあがった事項は、大ざっぱに一般語で言い換えれば、謙譲の美德、謝罪の精神、相手に対する心遣い、規範尊重、ということになる。これらの概念は、社会的に様々な経験をして、日本社会で尊重されている概念であることに気づいていく類のもので、それらが言語行動と結びついたときに具体的に現れるものが成熟語彙・表現である。鈴木は大学4年生として、収集した注釈表現364を自分で使うか否かをチェックしている。それによると210(57.7%)は使う部類に入るということである。就職活動を活発にやり、会社訪問で成熟語彙・表現が増えてきた時期で、平均的大学生よりは使い慣れている様子で、大人の言語発達の真っ最中という感じであった。日本社会の重要な概念にも実感を持ち始めた様子であった。

鈴木の研究は、成熟語彙・表現の一部をなす注釈表現の分類に話者の気持ちや配慮を織り交ぜたところに意義がある。まだ、試行錯誤の段階であるが、多くの実例を分析することにより、項目の整理が可能である。ハウツー本を中心に、大規模な成熟語彙・表現のリストを作り、話者のどのような気持ちがありどのような配慮がなされているのか、ポライトネス理論も応用して分析をおこなうことは、成熟語彙・表現の体系、ひいては大人の言葉の特徴や体系を明確にすることができるであろう。

一方、大人の言葉、成熟語彙・表現の収集として、時間がかかるが必ずやらねばならない研究方法として、実際の発話の記録の分析を忘れてはならない。英米の言語研究は、この実際の発話の記録が大きな位置をしめている。テレビ

ドラマのシナリオを利用する場合もあるが、自然な発話とは異なるという意見もあり、実際の発話をテープやビデオにとり、それを文字化し、分析するというのが理想とされている。

3. 2 言語偏見と成熟語彙・表現

大人の言葉や成熟語彙・表現を体系的に把握するとともに重要なことは、社会の中で期待されている「大人としての言語の発達」の状態を具体的に研究することである。また、社会の構成員が「大人としての言語の発達」にどのような意識を持っているかも解明していかなばならない。

『ちょっとしたものの言い方』(パキラハウス 1990)の帯には、

いま、その人の知性・家柄・ステイタスはちょっとした「口のきき方」から。

と書いてある。カバー表紙裏には、

フォーマルな言葉のやりとりがいま魅力です。

この本には1000の定型が収録されています。

- 1 礼儀正しさ
- 2 聡明さ
- 3 自分がある

きちんとした席でちゃんと話せるあらたまった言い方、

頭のよさを感じる言いまわし、おくゆかしい表現、

人柄を感じる言葉の選び方…

成熟したおとなの文化の一端がここに 있습니다。

と書いてある。これらは本の宣伝のキャッチコピーであるが、そこには人が言葉を「話し手の人となりをあらわすもの」としてとらえていることが、凝縮して示されている。知性、家柄、社会的地位、聡明さ、人柄の良さ、成熟した大人であること、が「口のきき方」でわかるという。これは社会言語学でいう言語偏見の実例である。

Hudson(1980, 1996rev.)は第6章を Linguistic and social inequality (言語的不平等と社会的な不平等)と題し、その中で Language-based prejudice (第1版では Linguistic prejudice 言語的偏見)を明確に論じている。人は他の人の話し方を、その人に関する非言語的な情報、例えばその人の社会的背景や思いやりや知性などのその人の個人的な特長、のヒントとして利用する。その際、AとBが既成概念として結びついている場合にAがあればBを、BがあればAを

想起するのと同じように、特定の話し方と特定の人の特長とを結びつけて理解する。言い換えれば、これこれこういう人の典型的な話し方はこういうもの、だからこういう言葉を使う人はこういう人、というようにステレオタイプを利用して話し方から人となりイメージする、これが言語的な偏見である。

Hudsonはこの社会に現存する言語的な偏見を客観的に研究する様々な方法を検討している。最も簡単に広く用いられている方法は subjective reaction test (主観的反応テスト)で、ある話者の発話をテープに入れ、それを被験者に聞かせ、テープで話している人の出身、職業、思いやりのある人か、知的な人か、親しみやすい人か、強いか弱いか、たくましいかしとやかか、等々を判断させるものである。これを改良したものに、matched guise technique (マッチ・ガイズ法)がある。これは、テープの声の質が調査に及ぼす影響を減らすもので、テープに録音する人は二言語使用者やさまざまなバリエーションを話せる人を選び、同じ人でも話し方が違うことによって、聞き手の判断がどう異なるかを見るものである。ただし、これら一連の研究には欠点もある。それは、与えられた刺激をもとに与えられた質問に答えるために、必然的に、自然の状態よりはより敏感にステレオタイプに注意を向けてしまうという欠点である。

言語偏見に基づく自然な反応を調べる方法も考案され、HudsonはGilesとPoweslandの実験を紹介している。ある人物が、Aの高校生のグループには標準語で、Bの高校生のグループには方言で、心理学の講義をする。その後、それぞれのグループの高校生に、実は講師が学校で心理学の講義をするのに適しているかどうかの調査であったので講師について評価してほしい、と依頼する。実験の結果は、同じ人物であるのに、「知性」に関する評価は、標準語を話したときの方が方言を話したときより明らかに高い、というものであった。

大人の言葉や成熟語彙・表現の研究においては、まず、あえて、ステレオタイプを意識に上らせ、それを解明する必要がある。成熟語彙・表現のリストから一つの言葉を選び、その話者を想像してもらうことで、そのことばがどの程度社会的に成熟した話者が話すものか、どのような人がそれを言うことを期待し、どのような人がそれを言うとおかしいか、を調べていくことができる。

筆者は30人ほどの筑波大学の学生に以下のような質問をし、答えてもらった。学生は社会言語学講義の受講者で、言語偏見、ステレオタイプなどの概念は説明済みである。

<質問> Xは、知人から元気がどうか聞かれたときに「おかげさまで」と答えた。Xはどのような人物か、ステレオタイプを利用して記述しな

さい。(性別、年齢、社会的地位／職業、性格などをリストアップする形で記述する)

ここでの言語的刺激は、知人から元気かどうか聞かれたときの返答としての「おかげさまで」一つである。

有効回答24、自由回答であるので、集計するには数が少なすぎるが、回答の内容は、「おかげさま」一つでそれを話す人がかなり限定されるということを示唆している。回答をいくつか以下にあげる(要約は筆者)。

1. 話者は、中年(30歳以上)の男性。

社会的に認められる程度の仕事、地位がある。

ビジネスの場で、教養・マナーを知る年代。

当たりさわりのない、穏やかで、教養のある人。

(回答者：大学4年、女性)

この回答は、社会的な地位があり、教養があり、穏やかな人格、という、平均的な内容である。

2. 話者は、40代後半から60代の女性。

部長夫人、お稽古の先生。

物静か、品がある。

ロマンスグレーで日傘の似合うおばあちゃま。

立派な一戸建てに住み、子供も親離れし、

自分の趣味に時間を割いている奥様。

夫が社会的に高い地位、会社役員、銀行支店長。

専業主婦、趣味でお茶、お花、習字教える。

和服似合う人。

(回答者：大学3年、女性)

始めに女性であることと特定の年齢層を回答したが、あとは、非常に具体的に人物を思い浮かべている。

3. 話者は、60前後の女性。

息子20すぎの主婦、サザエさんのいささか先生の妻。

しっかり者、堅いが近所とうまくやる。

あるいは、60前後の男性。

会社員、模範的な家庭、苦勞あり、橋爪功。

世間体を重んじる分、近所の評判高い。

部下から頼られ、上司からの評価は低い、ゴルフが趣味。

(回答者：大学1年、男性)

この回答者は、始めは年齢は60歳前後とイメージしたが、具体的な人物を考えて、そこから人物像が明確になっていったようである。

この小規模な調査では、主観的反応テストのように回答を細かく誘導せずに、回答の仕方のポイントは示したが、自由回答にしてある。これは、実際ステレオタイプを利用する場合、人はどのようなプロセスで成熟語彙・表現から人物像を明らかにしていくのか、分からなかったからである。特定の言語集団(例：不良っぽい女子高校生、トラックの運転手、9時から5時までに働くサラリーマン)がはっきりしている場合は、その言語集団の名称をあげるであろうし、そうでない場合は、どのような答え方が一番感じていることを素直に言い表せるのであろうか。年齢、職業、性格、などの項目ごとに抽象的に答えていくのか、とすれば、どのような項目が回答の視点として含まれるべきなのか、あるいは、最も典型的な人物を一人設定して、その人について記述するのか、等、ステレオタイプ利用のプロセスや具体的内容が分かっていないのである。今回の被験者は、後者の具体的な人物を一人思い浮かべ、そこから答えていく、という回答方法をとっていると見られる者が2割程度いた。人物像の視点としては、性別、年齢、職業、社会的地位、家庭、趣味、知性、教養、まじめさ、社交性、上品さ、礼儀正しさ、要領のよさ、穏やかさ、控えめか、などが重要であることが分かった。成熟語彙・表現の主観的反応テストは、現段階では様々な改良を要するが、成熟語彙・表現にまつわる言語的偏見を明らかにし、成熟語彙・表現の実社会での地位を明確にすることができる有効な方法である。

もう一つのやり方として、特定の語とその話者の関係を、この言葉はこの人が話すことを期待するか否かという視点で、社会の構成員に判断してもらう方法も有効である。いわば、成熟語彙・表現と話者の適齢期に関する共通理解を抽出するのである。前述の柴田の「母と言えるようになるまで」の研究が一例である。

筆者は16の表現(例：私の方から伺います、夜分恐れ入りますが、おかげさまで、いつもお世話になっております、等)について、9種類の人物のカテゴリー(小学校高学年、中学生、高校生、大学生、セブンイレブンのアルバイト、秘書、サラリーマン、トヨタのセールスマン、主婦)の人が使うかどうか、期待の度合いを「とても期待する」から「全く期待しない」までの5段階のどの程度なのかを答えてもらう小規模な調査をした。その結果は、年齢が上がるに連れて徐々に期待度が上がっていく表現と、職を持つことで急に期待度があが

る表現があることが分かった。後者は自分に非がないのに言う「申し訳ありません」、お元気ですかに対する「おかげさまで」、「いつもお世話になっております」のようなもので、言葉の背景となっている概念の理解に何らかの指導や社会的経験が必要なものと考えられ、高度な成熟語彙・表現といえるものである。(Kawasaki to appear)

成熟語彙・表現に関する社会的期待や話者の適齢期に関する調査は、回答者の性別や世代差が大きいと推測されている。上記のような、特定の表現と特定の人物カテゴリーとの結びつきの調査を、様々な世代を含めて大量調査することができれば、どの程度の表現をどの程度の人が使うのかに関する、社会で共有されている規範が明確になる。

それと同時に、そのような規範をどう思うか、これは日本だけでなく国際比較の点で興味深い問題である。どの言語でも成熟語彙・表現は存在する。日本の場合は、それを認め、自分もそれを使う年代や状況が来たら使いたいと思ひ、話者が意識的に学んでいこうとする態度がある。アメリカ英語の場合、ある女性は、「学生の頃 lovely という言葉を中年の女性がよく使うことに気がついた。しかしその響きがひどく中年の女性的で、自分はその世代になっても決して使うまいと思った。しかし、中年になり、子供ができ、ふと気がつく、自分は lovely という言葉を使っている。」と述べていた。これは、成熟語彙・表現を否定しながらも、その適齢期になると自然と使ってしまう例である。一方、違う女性は、「銀行に勤めるようになり、様々な役に立つ言い回しがあることに気づいた。仕事のために他の人の会話から意識的にそういう言葉を見つけだし、どんどん使うようにした。」と述べている。この人は銀行員としてバリバリと仕事をしているタイプである。銀行内成熟語彙・表現とでもいうべきものがあり、それをストラテジーとして積極的に利用している例である。このような、言語意識を明らかにしていく研究は、インタビューがかなり有効であろう。

最後に、大人の言語発達のプロセスの研究について、簡単に述べる。これは、長期にわたるケース・スタディーができれば理想であるが、社会人になりたての人々に対象を絞っても、かなり明らかにできる部分であろう。その場合、個々の体験が貴重なデータとなるので、質問紙に面接を加えた方法で、被験者一人一人のケースを明らかにする必要がある。

4. まとめ

本稿では、大人の言葉、成熟語彙・表現などの用語を定義しながら、大人の言語発達という研究分野を明確にし、そこでの可能な研究方法を検討した。未開拓の分野で、引用研究も小さい実験的なものを中心で、まだまだ多くの研究の方向、方法が可能である。これから、いくつもの研究が実際になされ、それらが有機的につながり、大人の言葉や大人の言語発達の全体像が見えてくることを期待している。

<注>

*本稿は平成7年度学内プロジェクト助成研究B、「日本語と米語における成熟語彙・表現の使用適齢期」の研究成果の一部である。

- 1) 「おかげさまで」及び、大人の言葉や成熟表現の種類に関しては、Kawasaki 1995の学会発表、及びその内容をまとめたもの (Kawasaki to appear) で詳しく論じている。
- 2) 「注釈」に関しては、杉戸の一連の研究で詳しく論じられている。

<参考文献>

- 知的生活研究所 1994 『大人のマナーことばの便利帳』 東京：青春出版社
- Eckert, Penelope. 1997. "Age as a Sociolinguistic Variable. In Siegel, Bernard J., Beals, Alan R., and Tyler, Stephen A., Eds., *The Handbook of Sociolinguistics*. Oxford: Blackwell. pp. 151-167.
- Hudson, Richard A. 1980, 1996rev. *Sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ハドソン, R.A.著, 松山幹秀・生田少子訳 1988 『社会言語学』 東京：未来社
- J.S.クリエーターズ 1991 『気のきいたひとこと』 東京：新星出版社
- Kawasaki, Akiko. (unpublished talk) 1995. "Linguistic Adulthood in Japanese" At The Eleanor H. Jordan Festival "Language in Culture" Portland State University.
- Kawasaki, Akiko. (to appear) "Linguistic Adulthood in Japanese." In Noda & Wetzel Eds., *Language in Culture*.
- Kawasaki, Akiko. 1994. "Socially Expected Norms of Linguistic Polite-

ness: A Study of Etiquette Books and "How to Books."

- 『言語文化論集 第38号』 筑波大学現代語・現代文化学系 pp. 247-257.
- 川崎晶子 1989 「日常会話のきまりことば」 『日本語学』 第8巻第2号
2月号 pp. 26-35.
- 川崎キヌ子 1994 『気の利いた ちょっとしたひと言』 東京：永岡書店
- 菊地康人 1994 『敬語』 東京：角川書店
- 村岡正雄 1992 『一人前のあいさつと話し方』 東京：日本実業出版社
- Ochs, Elinor & Schieffelin, Bambi B., Eds. 1979. *Developmental Pragmatics*.
N. Y.: Academic Press.
- パキラハウス 1990 「ちょっとしたものの言い方」 東京：講談社
- Schieffelin, Bambi B., & Ochs, Elinor. 1986. "Language Socialization" In
Annual Review of Anthropology Vol. 15. pp. 163-191.
- Schneider, Barry H. 1993. *Children's Social Competence in Context*.
Oxford: Pergamon Press.
- 柴田 武 1978 『社会言語学の課題』 東京：三省堂
- 塩見邦雄 編 1986 『発達心理学総論 エイジングの心理学』 東京：ナカ
ニシヤ出版
- 杉戸清樹 1996 「メタ言語行動の視野」 『日本語学』 第15巻第11号 10
月号 pp. 19-27.
- 杉戸清樹 1989 「言語行動についてのきまりことば」 『日本語学』 第8
巻第2号 2月号 pp. 4-14.
- 杉戸清樹 1983 「待遇表現としての言語行動 注釈という視点」 『日本語
学』 第2巻7号 pp. 32-42.
- 鈴木亜紀 1995 「日本語の注釈表現について」 筑波大学第一学群人文学類
言語学（応用言語学）卒業論文